

1.2 子どもの発達と保育 —情緒社会を中心として—

吉村真理子 小島寿美代 鶴田一サ 東郷淳子 ○清水恵子
(東京都公立保育園研究会・共同研究委員)

そのⅡ 保育内容

〈目的〉

保育内容を検討する。

- そのⅠの発達の実態調査で明らかにされた特徴をもとに、保育のポイントをさぐる。
- 保育のねらいや、保育上の心づかいを考える。

〈研究方法〉

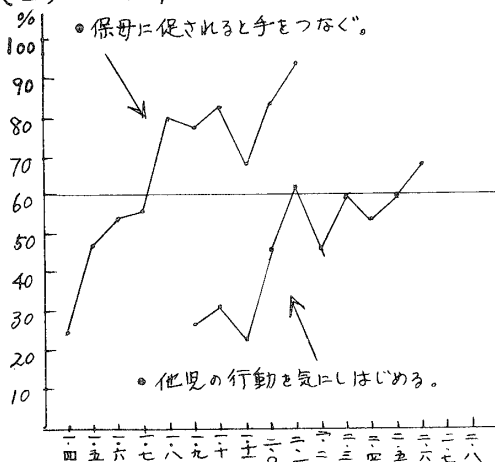
- A.情緒社会の発達傾向をみる。
- B.他の領域との関係をみる。

〈結果及び考察〉

情緒社会は生活習慣の自立や運動機能のような上昇線をたどらず、複雑な線を示しながら発達していく。次第に大人(保育者)の意志も理解を始め、他児への関心も強まってくるが、未だ子ども同志の交渉のしかたは未熟でトラブルも多い。このような人間関係が密接に影響し合って発達していく様子を下記に示してみる。

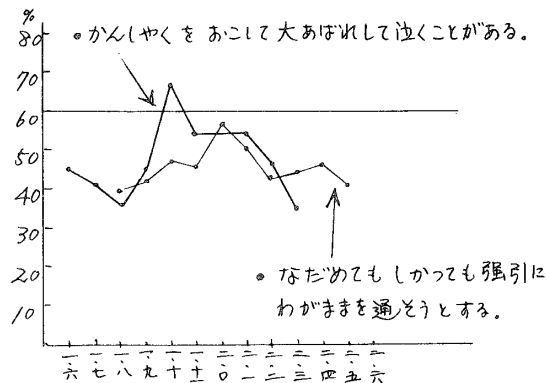
A.情緒社会の発達傾向と、そのⅠで述べた発達の型によって例記してみると、

(1) 急上昇群



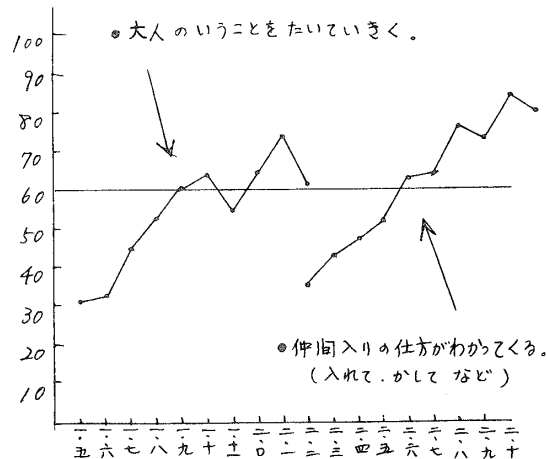
集団生活の中で他児の行動を気にし始めるのは、2才前期であり、子ども同志の関係としては発達の初期といえよう。しかし、その前段階には保育者が、子ども同志手をつながせたり、あそびの中で子ども相互のふれ合いを経験させるなど、親しみが増すような働きかけを行っている事がわかる。無理にさせるのではなく、保育者が仲立ちとなって、二・三人いっしょに遊ぶ自然な経験も大切であろう。

(2) 上昇下降群



1才後期の一時期には、自分の欲求や意志をはつきり意識し、思う通りにしたいという傾向が強くなる。その後しばらく欲求をあさねがまんできる傾向が見られる。保育者は、子どもの要求の表れし方を理解するのは勿論だが、この年令の情緒の動きもよくわかって保育することが大切である。

(3) 緩上昇群

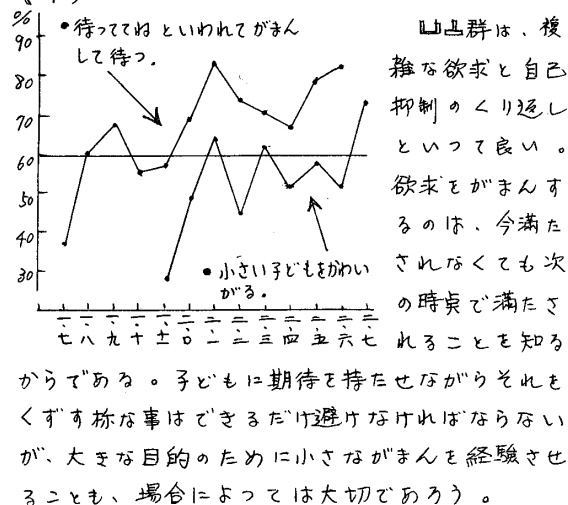


大人のいうことをきくようになるには、子どもの依存や欲求を、大人が十分に受入れてやり安定した良い関係の成立が基礎になっている。

他児との関係でも、遊びの仲間に入れてもらえない経験もくり返すことによって、次にはどうしたらよいか、徐々に方法を学びつついる。

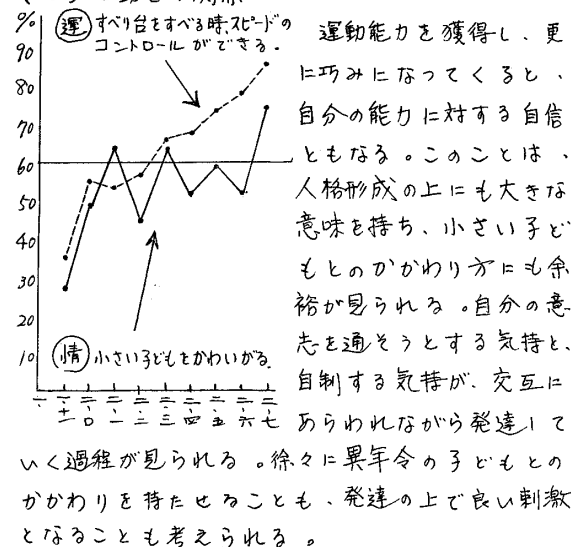
このように、経験の積み重ねによって体得していく発達は、保育者のきめ細かな適切な働きかけが日常くり返される事が重要である。

(4) 山崎群

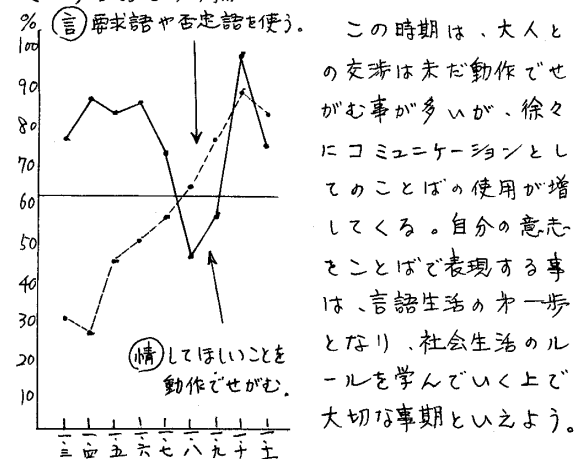


B.他の領域との関係を見ると、相互に大切な側面としてかかわりあって発達している。

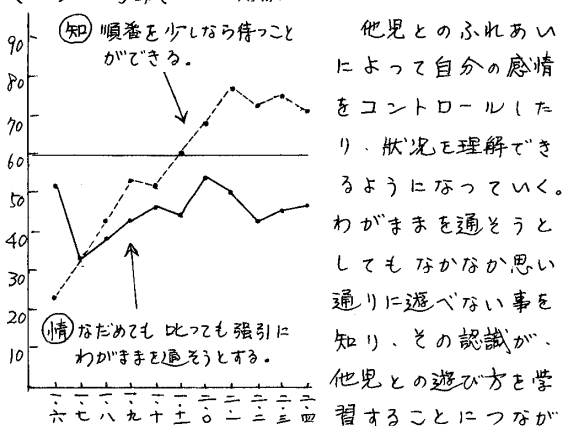
(1) 運動との関係



(2) 言語との関係



(3) 知的働きとの関係



年齢が進むにつれて気の合った友達と短時間遊べる、など、知的発達とは他児とふれあい、刺激を受けながら発達していく姿が見られる。

<まとめ>

1.2才児の情緒社会は、乳児期に培われた大人の愛情、豊かな人間関係を基礎にして、徐々に他児とのつながりも深まっていく。

特に、他児との関係は、相手を泣かせたり、自分も泣かされる経験をくり返す中で、相手の存在を知り、相互交渉のしかたを学習する時期である。

1.2才児を集団の枠の中で見るのではなく、発達にはそれぞれ特有のリズムがあるので、発達特徴をとらえて指導する必要がある。

次に、保育上の心づかいを具体的にのべておく。

○1才7ヵ月～2才未満

- 玩具の取り合いでお互いに泣くなどのけんかも多くなるが、危険のないよう見守り、双方に不安や悲しみの感情が残らぬよう、又他児とのかかわり方を知らせていく方向に働きかけをする。又、他児に妨げられずに一人遊びを十分にさせる配慮も必要である。

○2才～2才6ヵ月未満

- 子ども同士は、お互いに相手のことを気にとめるが、自分本位であることを保育者は承知して、一緒に遊んだり物を分け合うことを教えていく。又、時にはけんかも必要な経験として見守り、徐々に相手の気持ちもわがらせる。

○2才6ヵ月～3才未満

- 感情が豊かになり、自己主張も強くなるにつれて複雑な行動(素直とわがままの両極端を示すなど)をとることもある。保育者は、それをよく理解し忍耐強く相手をし、時には機知とユーモアを以て保育する事も必要である。